

2007年 9月号 致知

昭和51年8月16日第3種郵便物認可 平成19年8月1日発行(毎月1回1日発行)通巻386号 chichi 2007.9 C 1,020yen
人間学を学ぶ月刊誌 chichi

致知

September

9

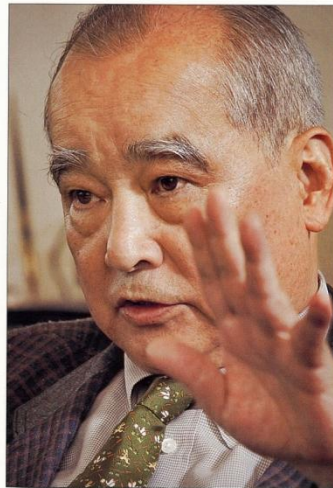
2007

●特集

運命を切りひらく

●対談

鈴木智之
福地茂雄



●対談

童門冬二
安部龍太郎

●鼎談

芳村思風 & てんつくマン & 中村文昭

名刺名刺名刺
上司の心得

● 童門冬二

部下が一人ついた時から、上司の悩みは始まる。打開策を求めて、ビジネス書のノウハウを探るのもよいが、上司たる者、もっと本質的な哲学を築き上げておく必要がある。

本書は、歴史的な名刺をとりもつて、組織の長としての信念を紹介。いまの職場でも通ずるエピソードが満載で、問題打開のヒントを与えてくれる。

「すぐわかりましたと言おう者にわかつたためしはない」(小早川隆景)、「人間は少し純いほうが役に立つ」(武田信玄)、「よい部下の諫言を聞かない上司は必ず自滅する」(徳川家康) 等々。
生死を懸けた戦いを通して、確立したリーダーの哲学が、心を打つ。
(P.H.P.研究所 一五七五円)

口述でわかる
日本再生プログラム

● 藤原直哉

健康と持続可能性を考えたライフスタイル「ロハス」(L.O.H.A.S.)。今日地球が直面している深刻な温暖化問題を解決する鍵はロハスにあり、と著者はいう。

ロハスは、日常使うエネルギーを少なくすることにより、環境への負荷を減らすこととする活動である。例えば車で通勤するところを自転車で行く、外食をやめて自炊するなど、誰でも簡単に長く続けられるところに魅力がある。

本書後半は、各界でロハスを提唱する著名人と対談。天変地異が多発するような危機的未來から取り逃げるため、一人ひとりが取組みから日本を低エネルギー社会に変えようという具体的事例を紹介。ロハスという新しい生活様式が、人々に定着する日も近いのかも知れない。
(万来舎 三七八〇円)

学んできた
86歳、こころ若く生きる

● 清川 妙

八十六歳現役エッセイストの著者が執筆を始めたのは、四十歳を過ぎからだという。遅いスタートである。さらに五十六歳から一念発起で英語を習い、六十四歳からは英国への一人旅を続けている。本書の冒頭に「六十歳くらいのだ」とあるが、それは心からの実感であろう。

いくつになっても自分育てはできる——それが短編エッセイ集である本書を通して一貫して著者が語り続けるテーマである。何げない日常の出来事、主宰する古典講座の受講生との交流、英国一人旅での「コマ……その瑞々しい描写と喜び上手な感性は、日本の古きよき時代の女生生を思い起こさせる。自分育てを続けるコツは、日々への慈しみの心にあるようである。
(あすなろ書房 一五七五円)

スタッフの夢を語るにやまらぬ！
てっぺん！の朝礼

● 大島啓介

毎月八百人、年間一万人もの参加者を集める居酒屋「てっぺん」の朝礼。「たった五分でチームが生まれ変わる」と現在、飲食業界のみならず教育関係者やマスコミからも注目を集めている。

本書では「てっぺん」で実際に行為されている朝礼の流れやポイント、成功のためのノウハウを実例を交えながら紹介。自分に対する誓いや公約を宣言する「テンパー11言」など、挨拶一つ返事一つにも手を抜かない「本気の朝礼」の魅力が余すところなく伝えられている。

「本気と本気がぶつかり合うことで、魂と魂がぶつかり合うことで、人は輝ける」という「てっぺん」社長の著者。実際に朝礼を受けた者の劇的な意識の革新。この朝礼から日本が変わるかも知れない。
(日本実業出版社 二二六五円)

蓮・心形

● 木暮照子

著者は人形作家。二十五年前に以来、その魅力と出逢って自ら、生ずる時代に惹かれ、これまで一貫して創作の題材としてきた。早朝から蓮池に通い、その姿や香り、開花音などを人間の姿に託して表現してきた。

著者によると、蓮の開花音は「吉祥の音」「種異様の美音」「妙な音」とも伝えられ、たとえ聞こえない音でもあった。「蓮の旅で出合った言葉は美しく、つつましく、心深くに届いた」という。

本書は蓮を手にする天女や童女の姿を通して、自然の神秘性を表現した著者の作品三十点を紹介。蓮は泥の中から生まれ、清浄で美しい花を咲かせる。慈愛と生命力に溢れる一つひとつの作品が、私たちの心を癒やしてくれることだろう。
(アイカワ 二二〇〇円)

BOOKS

10歳から起業すると決めていた

● 鶴岡秀子

「会う人すべてを先生と思いなさい。十歳で起業する志をたてた著者が、親から教えられた言葉である。

小さい頃からの言葉や胸に刻みこんだ著者は、二十代の若さで三つの会社を起し、インターネットベンチャー企業では年商十四億円も達成。夢を次々と実現し、現在は念願だったホテルマネジメント会社に力を注いでいる。

「どんな選択も自分の責任である」という感覚を持つ「この人となら一緒に仕事をしたい」と思われる人になる。「自分自身を信じている人であることが大切」。

成功者の方法論ではなく、マインドを学ぶ実践してきた著者の実践に基づき、本書はどんな仕事にも共通する真理を具体的に説いている。夢を夢のまま終わらせるのではなく、一度きりの人生を自分らしく生きてみたいと思わせる一冊。
(ダイヤモンド社 一五〇〇円)

宮崎総子のわが家の食卓

● 宮崎総子

心から安らげる家族とおいしい手料理。これに勝る栄養はないだろう。著者の義兄である俳優・仲代達矢氏、こんな忙い時でも撮影所からまなすず自宅に帰ってきた夕食をとったという。手作りの物は作った人の心が届いて温かく、元気が出るのだ。

元フジテレビのアナウンサーである著者は、幼い頃から母の愛情たっぷりの料理を食べて育った。本書はいまは亡き姉との約束である「お母さんの料理を作ろう」という著者の願いが込められた作品。家庭でも簡単に作れる料理レシピを、料理にまつわるエピソードで自分紹介している。

常に謙虚で自分のことより他人の幸せを願い、「人の見えないところでいいことをする」という信念の持ち主だった著者の母。その誠実で手抜かない姿勢に、単なる料理方法にとどまらぬ人の生き方を学ぶことができる。
(角川学芸出版 一五七五円)

致知出版社の新刊

修身教授録 一日一言

森信三・著／藤尾秀昭・編

「修身教授録」は、戦前、天王寺師範学校で行われた森信三氏による「修身科」の講義録であり、発売から約七十年を経た現在も版を重ねるロングセラーである。教育界のみならず、経済界やスポーツ界、という人生普遍の真理が流れている。

その最良のエッセンスだけを取り出し、三百六十六の言葉にまとめたのが本書である。仕事の心掛けや人生の歩み方から人間の価値まで、短くも明かな言葉で説かれるその根底には、「人生二度なし」という人生普遍の真理が流れている。

本書(八月十日、真の良書)にこうある。「真の良書というものは、これを読むものに對して、その人の人生行路を決定していく意義を持つ」。本書は読者の皆様にとって真の良書となるに違いない。
(定価 二二〇〇円)

時流を読む眼力

渡部昇一

「格差社会」という言葉が定着して久しい。多くのマスコミが、国民の経済格差が広がっていることと報道し、不安感を煽っている。しかし、貿易黒字が二十兆円を超える今日、日本は悪い方向へ向かっているといえるのだろうか。

これは一つの例に過ぎない。ほかにも、「産む機械」発言、富田メモ、年金問題等のいたずらに事を大きくしようとする報道に異を唱え、その本質に切り込んでいる。また、東京裁判、従軍慰安婦問題等では、膨大な文献から真実を読み取り、同時に、利益を認めない政治家を糾弾している。

本書は、本誌連載中の「歴史の教訓」をまとめたもの。間違った歴史認識、自国を卑下するような報道に惑わされない眼力を身につけるための必読書である。
(定価 一四七〇円)

いま話題の本

- | | |
|---|--------------------------------------|
| ① もし、坂本龍馬が営業マンだったら
レレレッジ・シンキング
(桑原正守/ダイヤモンド社) | ① 何のために働くのか
(北尾吉孝/致知出版社) |
| ② 世界一やさしい問題解決の授業
(渡辺健介/ダイヤモンド社) | ② もし、坂本龍馬が営業マンだったら
(桑原正守/ダイヤモンド社) |
| ③ 女子高生ちえの社長日記
(甲斐正正/プレジデント社) | ③ 宿澤広朗 運を支配した男
(加藤仁/講談社) |
| ④ 小さな会社のできる社長!
(朝山直臣/フォレスト出版) | ④ 世界一やさしい問題解決の授業
(渡辺健介/ダイヤモンド社) |
| ⑤ 投資信託にだまされるな!
(竹山美奈子/ダイヤモンド社) | ⑤ レレレッジ・シンキング
(北尾吉孝/致知出版社) |
| ⑥ 「心のDNA」の育て方
(石井裕之/フォレスト出版) | ⑥ 富裕層の財布
(池上彰/PHP研究所) |
| ⑦ 「1日30分」を続けたい人生勝利の勉強法55
(古市幸雄/マガジンハウス) | ⑦ 「新規事業」はどうすれば育つのか
(吉井信隆/かんき出版) |
| ⑧ 何のために働くのか
(北尾吉孝/致知出版社) | ⑧ 大人のための ビジネス理論一夜漬け講座
(改井真帆/宝島社) |
| ⑨ 心と行動の軌跡
(三浦隆/第二海報社) | ⑨ 2010年の衝撃
(改井真帆/第二海報社) |